《論文》

明治後期から大正初期にかけての『フェイマスストーリーズ』の受容

佐野　幹

１．はじめに

「ダモンとピシアス」の話型は近代学校教育が始まってから現在に至るまで継続して教材として取り扱われてきた。その間 140 年以上の長きにわたっている。

調査を進めていく過程で、特定の時期に後世に大きな影響力を持つテキストが存在することが分かってきた。近年であれば、それは太宰治の「走れメロス」ということになるが、近代教育が開始する明治初期では『泰西勧善訓蒙』という箕作麟祥が訳述した修身教科書がそれに該当している。この中の「ダモンとピチアス」の話が後続の修身教科書や国語教科書の教材として採用され、時には書き換えられながら引き継がれたのだった。

そして中等教育機関が整備された後の明治 34 年には、『フェイマスストーリーズ』が日本に紹介され、その中にある「ダモンとピシアス」（Damon and Pythias）の話が明治後期から大正にかけて流通するようになるのである。

フェイマスストーリーズとは明治 34 年に日本に移入されて以来普及した「英語副読本」のことである。西洋の逸話を中心に 50 話を収めた読み物集で、ジェームズ・ボールドウィンによって著された。日本に移入された初期には、英語初学者にとって読みやすく、かつ英米文学の予備知識を獲得できる文学教材として、高等女学校、中学校を中心に用いられた(1)。

当初は三種類（文武堂版、鍾美堂版、興文社版）のフェイマスストーリーズが世に出回っていたと考えられ、文部省の『中学校・高等女学校現在使用教科図書表明治 40 年度』には、文武堂版が中学校で 3 校、鍾美堂版が中学校で 17 校、そして興文社版が中学校での 38 校に加えて高等女学校 4 校での使用が記録されている(2)。また、江利川春雄は戦前の英語副読本 781 種の中で、検定に認可された文学作品の数を調査しているが、その中で一番多かったのが N.Hawthorne の作品で 31 件、次いで *Aesop's Fables* が 25 件、*Arabian Nights* が 15 件、*Robinson Crusoe* が 14 件、*Tales from Shakespeare* が 12 件、そして、*Fifty Famous Stories* が 9 件で、次に *Grimm's Fairy Tales*（8 件）、*Gulliver's Traveles*（7 件）、C.Dickens の作品（6 件）、*Cuore*（6 件）であったとしている(3)。

フェイマスストーリーズは著名な作家・作品に劣らず高く支持されたテキストだったのである。

このテキストは明治 40 年代になるとメタテクストを生み出し、幾種もの教育メディアに変換される。注釈書、参考書が発行されただけでなく、そのストーリーが翻訳・翻案され、学校や家庭で子どもたちに読まれることになるのだ。

本稿では、調査した範囲ではあるが、明治後期から大正初期にかけてフェイマスストーリーズをもとにして作成されたテキストを検討する。先行研究では、尾崎るみが「グレース・ダーリング」の話を中心にフェイマスストーリーズと他のテキストとの関係を綿密に論じているが、Damon and Pythias については触れられていない(4)。Damon and Pythias が掲載されたテキストについては奥村淳が幅広く紹介している(5)。ただし、それらのテキストにどのような意味があるのかを明確にしているわけではない。

そこで本稿は、それぞれのテキストに書記された翻訳者や編者たちの言説を対象としてフェイマスストーリーズにどのような意

義を見出し、価値や権威を付与していったのかを読み取ることとする。そうすることで明治後期から大正初期にかけてのフェイマスストーリーズと「ダモンとピシアス」の受容状況の一つの側面を明らかにしたい。

２．英語学習用のテキストの調査

この時代、フェイマスストーリーズは、英語学習のための参考書と子ども読み物とに分かれた形で変換されて流通した。まずは英語学習用のテキストを順に見ていくことにしよう。

『フィフティフエィマスストゥリズ』

訳注者は紀太藤一、大正 3 年 10 月、武田芳進堂から発行された文庫本である。本書巻末の広告文によると、「英学生文庫」のシリーズものとして「第一編　グリムお伽噺」「第二編　イーソップ物語」に次ぐ第三篇として刊行されたようだ。「字書なしで読める親切丁寧な訳註書」というキャッチコピーのとおり、英語を独学で読むための仕掛けが詰め込まれている。本文に番号を付して区切り、ページを三段に分割している。上段に英文、中段は訳文、下段には詳細な注釈が施されている。中段の訳文の中には単語や熟語、発音符等が挿入されている。この方法について訳注者の紀太は、語学的な研究を目的とした「直訳法」を用いた、としている。

残念ながら Damon and Pythias（「ダモンとピシアス」）は存在せず、1 話から 12 話まで（King Alfred and the Cakes、The Miller of the Dee、King Cannte on the Seashore、The sons of William the Conqueror、The White Ship、King John and the Abbot、A Story of Robin Hood、Bruce and the Spider、The Black Douglas、Three Men of Gotham、Other Wise Men of Gotham、The Miller of the Dee）が採録されている。

フェイマスストーリーズを選択した理由は、英語学習者にとって「必読すべきものにして読者に利益と興味とを与ふべきものを選」んだ、と記されているだけで、文学的な価値については関心が払われていない。

『歴史物語』

訳注者は菅野徳助・奈倉次郎で、明治 44 年 5 月、三省堂出版から発行された。日本語名は『歴史物語』となっているが、表紙を見ると「JUVENILE ENGLISH LITERATURE 青年英文学叢書　FAMOUS SOTORIES JAMES BALDWIN 」とあり、フェイマスストーリーズであることが判明する。「青年英文学叢書」の第二十篇であった。

このシリーズは三省堂が課外学習を行う中学生や英学生をターゲットにした企画であった。「青年英文学叢書刊行に就き謹告」という序文には「中学生諸君教課以外英語練習の読物として且つ一般英学生諸君の有益なる伴侶として本叢書刊行を企画致し候」とある。また「叢書序」には「大家の手に成るもの、或は青年の必読書として世に伝はるものゝ中より、其内容文章共に英文の至珍とすべく、特に我青年諸子に利益と快楽とを与ふるものを撰抜せり。」とあり、高く評価されている。

しかし、採録された話は 50 話中、10 話（「アルフレッド王と餅」「アルフレッド王と乞食」「カニュート王海岸の戒」「ウヰリアム勝王の息子」「白船」「ジョン王と僧正」「ブルースと蜘蛛」「サー、ハムフレー、ギルバート」「サー、ウォルター、ラリー」「グレース、ダーリング」）に過ぎず、Damon and Pythias は存在しない。

一字一句を忠実に訳しており、本文を段落ごとに区切り、「原文」と「訳文・注釈」とを交互に配列している。

フェイマスストーリーズについて「本篇緒言」に以下のように記されている。

James Baldwin 氏が少年子女の為め古来有名なる歴史談五十を選びて簡短に平明

に書き綴りたるもの Fifty Famous Stories として極めて広く世に行はる。本編は又其中より十題を選びたるもの也、他の四十題も追々紹介するの機あるべし。Baldwin 氏の文章は散文ながら一種の風韻を帯びて読誦自ら飽かしめざるの妙趣あり、殊に幼年者の読物として用語文体の注意頗る行届きたれば我国の英語諸学者の伴侶として最も好適の著作なり。況んや物語の内容は世界の逸話として何人も知らざる可からざるものなるに於てをや。本編の読者は啻に解読のみならず此文句用語を取りて作文実習の資料となさば大に得るところあるべきを信ず、蓋し作文の初歩は必ず斯かる簡明平易の文体よりすべきものなればなり。

初学者に適した難易度、魅力的な文体、世界の逸話に関する知識、そしてライティングの手本としても評価されている。

『著聞五十譚』

訳註者は吉田潔であり、明治 44 年 4 月、金刺芳流堂から発行された。ちなみに筆者の手元にある資料は大正 6 年 6 月に発行された「訂正 6 版」であるため、明治 44 年 4 月の初版に関する情報ではないことは予め断っておきたい。

50 話全てが翻訳されているが、本文は逐語訳を用いており、語学の参考書としての性格が強い。注釈が充実しており、本文には注釈と対応した形で段落番号が振られている。このような本書のあり方について訳注者の吉田は次のように説明している。

訳文には成るべく読者の便を計つて原文の意を直写する為に、逐語訳を用ひて句点も原文其儘に切つてある、脚注には多年経験ある英語教師が教壇に立つ態度を以て丁寧に説明してあるから読者を十分に満足させることゝ自信する。

「デモンとピセイアス」（Damon and Pythias）でも語と語を対応させて日本語に訳そうとした様子がうかがえる。例えば、冒頭部分は原文では、“A young man whose name was Pythias had done something which the tyrant Dionysius did not like.” とあるが、訳文では「ピセイアスと呼ぶ一人の若い男は何んか暴君デオニシヤスの御気に召さなかッた事をした。」としている。something を辞書通りに訳したことでぎこちない訳になってはいるが、逐語訳を心掛けていることが分かる。

辞書をなるべく使わずに一人でテキストと照らし合わせて学べるようにと作られた参考書と言えるだろう。巻頭に英文で書かれた「PREFACE」もあるが、本書の利点を説明するばかりで、フェイマスストーリーズの文学的価値については触れていない。

『新訳フェマス物語』

奥付には著訳者として、織戸正満の名がある。明治 42 年 8 月、日進堂書店から発行された。

「第一章　アルフレッド王と菓子」から「第五十章　ミーニオン」までフェイマスストーリーズに採録されている 50 話全てが翻訳されている。本文は口語体を用いて平易な日本語に訳されているが、下段には注釈や語句の意味が付されており、語学学習用のテキストとして作成されたことが分かる。

Damon and Pythias は「第三十一章　ダモンとフヰシアス」と訳され、幾分意味を加えている箇所も見られるが、本文の内容を忠実に伝えようとした跡が見て取れる。冒頭部分は以下のとおりである。

此にフヰシアスと謂ふ若い人があつて暴君デオニシアスの意に障る様な事をした

この翻訳態度について織戸は、

> 翻訳の目的の一般が既に参考書とするにあるから訳文は力めて原文を離れざる事を旨とし更に難解の語句、熟語等の場合は之を抽出して註解を附したのである。

と「序」で述べており、学生の語学学習に供することを第一義とし、語句、熟語の習得を重視していたことが分かる。しかし同時に、フェイマスストーリーズに読み物としての教材価値も見出していたようだ。

> 此書〔フェイマスストーリーズ〕たる行文平易流暢、其内容とする所は豪壮、優美、壮烈、悲痛、或は濃艶、或は瀟灑、或は秋霜烈日の意気あり、或いは春和陽蕩の温情あり、而して時に洒落たる滑稽の中に辛辣なる諷刺を寓する等、所謂談笑の間天下の大道を説くの目あり、即ち日夜之に学ぶ、青年子女は不知の間に西洋古今の偉人傑士、烈女節婦の行為を見冥々の裡に其偉大を感得するに至り、我固有なる大和魂は、愈々純化して遂に尺壁微瑕なきに及び彼等の将来をして善良なる人士たらしむるのみならず延いては帝国々民として光輝あるものならしめん。
>
> 之れ今回自分が之を訳す所以であるので一は以て青年諸子の研究に便し一は以て其品性修養の質に供するのである。

フェイマスストーリーズを語学学習のための材料として捉えているだけでなく、「品性修養の資に供する」ことができるテキストであることも高く評価しているのである。

『新訳西洋五十名話』

奥付には纂訳者として、近藤敏三郎の名があり、発行は明治 43 年 10 月、東京の精華堂書店からである。

目次を見ると原書の構成に変更を少し加えているのが分かる。原書同様に目次には 50 のタイトルがあるが、フェイマスストーリーズにある Three Men of Gotham、The Endless Tale、Mignon の 3 話がカットされている。これは意図的な削除というよりは、翻訳した原本として文武堂版のフェイマスストーリーズを使用したためと思われる。文武堂版では上記の 3 話が削られ、話の中の詩の多くが削られているが、『新訳西洋五十名話』でも同じ詩がカットされているからだ。しかし、文武堂版とも異なる点もある。アルフレッド大王に関する二つの話（King Alfred and the Cakes と King Alfred and Beggar）を「一　アルフレッド大王」として一括りにした上で、小見出し（「(其の一）…大王と菓子」「(其の二）…「大王と乞丐」」）を設けている。また、Whittington and his Cat という長め目の話を 5 つの課に分割し、「四三　ウヰッチングトンと彼の猫…（其の一)」「四四　ウヰッチングトンと彼の猫…（其の二)」「四五　ウヰッチングトンと彼の猫…（其の三)」「四六　ウヰッチングトンと彼の猫…（其の四)」「四七　ウヰッチングトンと彼の猫…（其の五)」と変更している。話のまとまりを意識した上で、原書と同様に「五十話」という話数に合わせるための調整を行ったと思われる。

Damon and Pythias は「二九　ダモンとフヰシアス」と題して、ストーリーには大きな変化はないが、特徴がある文体で訳されている。一例を「フヰシアス」が戻って来た場面で見ると、原文では “Then the jailer came to lead him to his death ; but at the same moment Pythias stood in the door.” となっているが、これを「鬼の如き牢役人は信義の人を駆つて断頭台に立たしめた、憐むべし、彼が頭首所を異にするのは寸秒の後である、間一髪、突如として刑場の戸の前に立つた壮漢がある、それは気息を切つて馳せつけたフヰシアスであつた、」などと訳しており、「脚色」と言っていいかは分からないが、修飾語

を加え、技巧を凝らした表現となっている。語学を習得させるよりも「読ませる」ことをねらった書きぶりとなっており、本書は翻訳書というよりは読物としての性格が強い。訳者の近藤も「はしがき」で次のように述べている。

> 少年に格好な読物が乏しいとは吾人屡々耳にする繰言である。
>
> 訳者は如上の見解から本書を出版せしめたので、原書は目下中学程度の諸学校で普く用ひらるゝ、ボールドウヰン氏の著、フエーマス、ストリーズである、(中略) 其の内容の如何にも豊富で、優美、豪壮、廉恥、忠烈、義勇、閑雅、温厚、寛裕、恬淡、洒落、諷刺、一として備はらぬはない、年少者が将来の国民性を作るのには、此の小冊子を読書界に呈したとて多過ぎはすまいと信ずる。
>
> 元来が学窓の余暇の読物として訳したのである、品性修養の一端にもと思つて訳したのである、故に原書の一字一句を追字訳したのではない、けれど原書を離れん程度に於て書き下したのだから、参考書として研究用に座右に置かれても宜しいと思ふ

英語の参考書としての使用も勧めてはいるが、徳目的な要素が多分にあることを評価し、ここでも「品性修養」、いわば人格の向上につながることを評価していたことが分かる。

以上このように並べてみると「語学的な用途」から「読み物的な用途」にかけて一本の軸が存在しているようである。最も語学的な用途で作られたのが『フィフティフエィマスストゥリズ』だとすれば、読み物的な用途で作られたのが『新訳西洋五十名話』である(6)。この間に他の各テキストの位置があり、その位置に応じて訳文の質も異なっていたといえる。

語学的な用途で作られたテキストでは、確かに興味深い内容や平易で優れた文体に価値を見出す言説は見られた。しかし実質的にはフェイマスストーリーズを、グリムやイソップとともに権威化し、それを所与のものとして訳読するために、どう分解し注釈を施すかに関心が向けられていたようだ。一方で、読み物的な用途で作られたテキストでは、フェイマスストーリーズに教育的な意義を認めていた。とりわけ注目されていたのは、フェイマスストーリーズが多様な道徳的意味内容を内包している点であった。読者の人格形成に資することができることに対する評価である。

なおこの評価は、後でも述べるが、子ども読み物の領域でも得られた評価である。フェイマスストーリーズが英語教材から子ども読み物へと跳躍できたのは、どちらの領域でも同じ物差しを持ち、読み物に対する価値観を共有していたことが一つ理由としてあったのではないだろうか。

次に、子どもを対象にした読み物を見てみよう。

3．子ども読み物の調査

『世界新お伽』

著作者は中村徳助であり、明治 43 年 12 月に盛林堂から発行されている。

目次には 83 話が並んでいるが（ただし目次に記されていない話も本文には含まれている)、フェイマスストーリーズからは 33 話収録している。典拠は、フェイマスストーリーズの原文ではなく、先に紹介した『新訳西洋五十名話』であったと思われる。Damon and Pythias も「タモンとフヰシアス」として含まれているが、句読点の違いや改行の有無を除けば『新訳西洋五十名話』と同じ文章である。「フヰシアス」が戻って来た場面を例示しておく。

鬼の如き牢役人は信義の人を駆つて断頭台に立たしめた憐む可し彼が頭首所を異にするのは寸秒の後である間一髪突如として刑場の戸の前に立つた壮漢があるそれは気息を切つて馳せつけたフヰシアスであつた

「凡例」には次のようにある。

近時御伽噺の新刊せらるゝもの日に多し、然れども多くは材料の陳腐に、話題の不敵なるを見る、本書は此に鑑みて極めて清新なる材料、恰当なる話題に由りて、編纂したり、全編を貫くに、友愛、孝心の精神を以てし、談笑綺語の間に、少年諸君を裨益する所少なからざるべし。

当時流行したお伽噺集の中には不適切な話題が多いと批判した上で、友愛、孝心といった徳性を楽しみながら身に着けられるような材料を選んで編集したという。さらに巻頭に掲げられた上田万年の序文でも、「材料の取捨宜しきに合ひ口話の順序体を得たり採つて以て座右に供へば教訓娯楽とり／＼に資する所少なからざるべし」と評価されている。フェイマスストーリーズや Damon and Pythias は、道徳を理解させることができる点が評価された形となっている。

『少年文芸世界お伽袋』

お伽研究会が編集し、明治 44 年 4 月に発行された。奥付では鈴木与八（盛陽堂）が発行したことになっているが、表紙には「同盟館発行」と記されている。

「序」に「東西古今の雄編傑作を輯め、題してお伽袋と称す」とあるように、この本もフェイマスストーリーズやその他のテキストから話を集めて編んだテキストとなっている。しかし、37 話中 24 話と、半分以上もフェイマスストーリーズから採っており、別の著作物としていいかどうかは疑わしい。

本文はフェイマスストーリーズを直接訳したものではなく、これもまた『新訳西洋五十名話』と同じ文章を用いている。表記方法も同じであり、「征服者ウヰリヤム王の王子」などは題名の上に「三」と課の番号をそのまま残して印刷しており、複製品とも呼べる代物である。なおこの中には Damon and Pythias は含まれていない。

以下「序」である。

我がお伽研究会は大に現代の悪潮を刷新し進んで少年、少女諸子の父兄となりて面白く、楽しき間に知能の啓発を計らんと欲するものなれば、本書が如何に有益のものたるかは乞ふ其内容に依りて知り給はん事を敢て云ふ

お話の力によって楽しみながら知能の発達を促そうと企図しているようである。

『学校家庭話の種』

著作兼発行者として石川栄司の名があり、明治 41 年 8 月の発行となっている。発行所は育成会である。フェイマスストーリーズの話は「第二編泰西名話の部」で採用されている。『学校家庭話の種』は複数のテキストから話を集めて編集したもので、Damon and Pythias は取り上げられていないものの全１７話中、７話（「一、牧人の頓智」「二、歴山大王と名馬」「四、弓矢の達人ウヰリアム、テルの勇毅」「六、尽きぬ話」「八、アンドロクラスと獅子」「一一、ポカホンタスの同情」「一二、ブルース王と蜘蛛」）がフェイマスストーリーズからの採用である。なおフェイマスストーリーズにある The Story of Regulus と同じモチーフの話も「一〇、レグラスの忠信」としてあるが、内容が大きく異なっていることから別のテキストから採ったものと考えられる。

物語内容に関しては、フェイマスストーリーズと大きな変更はない。そして平易な言葉

を用いて訳しており、漢字にも総ルビで対応している。そのため比較的学年の低い子どもでも読めるようになっている。

フェイマスストーリーズを採用した理由については、「序文」や「まえがき」に相当する記述がないため直接知ることはできないが、発行元の育英会は『学校家庭話の種』のシリーズとしてこの「泰西名話の部」以降も、「印度名話の部」、「希臘名話の部」と続けて発行していることから(7)、少なくとも世界の地域ごとの有名な話を紹介するに際して、西洋の話の代表としてフェイマスストーリーズの話を考えていたのだろう。

『家庭物語』

著作は松本赳であり、大正 2 年 7 月に婦人之友社から発行されている。

「序」によると、筆者が中学時代に教わった英語読本から面白い話を選り抜いて編集したものだという。33 話ある話の中でフェイマスストーリーズの話は「八　ブルースと蜘蛛の話」「十　ジユリアス・シーザーの話」「十六　賢人ダイオゲネスの話」「十七　コルネリアの宝玉の話」「十八　征服者ウイリアムの三王子の話」「二十　ジー河の水車屋の話」「廿二　王を救へる鷹の話」「廿五　アルフレッド王と菓子の話」「廿七　アンドロクルスと獅子の話」「廿九　ソクラテスと其住家の話」「三十　ホイツチントンと猫の話」「卅一　盲人と象の話」の 12 話ある。「廿二　王を救へる鷹の話」「三十　ホイツチントンと猫の話」などでは挿絵もフェイマスストーリーズで使用されたものを真似て取り入れている。なお、フェイマスストーリーズの The Story of William Tell と同じモチーフの話も「一　テルわが子の頭の林檎を射りし話」としてあるが、内容に違いが見られることから他の英語読本の話と思われる。なお Damon and Pythias は選ばれていない。

読みやすく完成度の高い文体となっており、漢字にも総ルビで対応している。本書は、家庭で母親が子どもたちに読み聞かせたり、子どもが一人で読んだりすることを想定して作られたようだ。松本は「序」の中で対象とする読者と本書の利点とを期待を込めて次のように語っている。

> いろ／＼な英語読本に載つてゐる話は皆な撰に撰つたものですから、普通のお伽話などとは違ひます。とりとめもない空想的なところなどはなく、面白い裡にも健全な教訓が含まれてゐます。だから家庭で小さい坊ちやん嬢ちやん方にもお聴かせになつても、又尋常五六年からのお子さんが、仮名をたどつて独りでお読みになつても、其の印象はかの世間にありふれたお伽噺から受くる感化とは全く違ふ所があるかと思ひます。とにかくかういふ話を読んで、大正年代の小さい男女が立派な品性を養ひ、健かに賢く、他日世界のため、国家のために、有益な働きをなすやうに生ひ立つとは、私の真心よりの祈であります。

世間で流行していた「お伽噺」を批判しながら、楽しみながら教訓を学び、品性が高められる点に意義を認めている。また、家庭で子どもの教育を担う者、つまり当時にあっては母親に対して語られていることにも注意したい。この時期は家庭での教育に社会の関心が高まっていた時期と重なり、良妻賢母思想のもと家庭教育の担い手に「婦人」が担ぎ出され、子どもを教育するツールとして、お話が使われたのだ。フェイマスストーリーズもその一端を担ったことになる。

『内外教訓物語』

著作者は馬淵冷佑であり、東京東京宝文館から発行された。『内外教訓物語』は三部に分かれており、明治 42 年 9 月に「天の巻」、明治 45 年 5 月に「地の巻」、そして大正 4 年 6 月に「人の巻」が発行された。「天の巻」は「実際らしからざるもの」（童話・寓話）、「地の巻」

は「実際らしきもの」、「人の巻」は「歴史的のもの」を収めたという(8)。

フェイマスストーリーズが収められているのは「地の巻」と「人の巻」である。「地の巻」は全部で 170 話あるがその内の「六　貧乏人の出世」「七九　牢屋の花」「八三　猫の資本」「九〇　幸福な粉ひき」「一三一　盲人と象」「一三五　獅子の恩返し」「一五二　尽きない話」の 7 話が該当している。「人の巻」は全部で 140 話あり、「一六　バタの獅子像」「三四　蜘蛛の教」「四八　デモクレスと剣」「五四　自由の一箭」「八九　成吉思汗と鷹」「一一七　貴い片眼」「一四〇　コルネリヤの宝石」の 7 話が該当している。ちなみにこれらの話には出典が「(フイフチー、フエマス、ストーリーズ。)」と明記されている。

Damon and Pythias は含まれていないが、「人の巻」の「八四　親友」は「ダモンとピチウス」の話であり、出典は「(シルレル詩集)」と記されている。ストーリーの大きな変更はないが、語順の入れ替えや説明の添加、語句の削除等、細部の表現は変えて訳している。例を「四八　ダモクレスと剣」で示す。天井から釣り下げられた剣を発見して怯えるダモクレスにデオニシャスが話しかける場面は、原文では、

> “What is the matter?” said the tyrant.
> “That sword! that sword!” cried Damocles.

となっているが、『内外教訓物語』では、

> 暴君はたゞならぬ様子を見て、
> 「どうしたんだ。」
> 「あの剣です。あの剣です。」

となっている。「暴君はたゞならぬ様子を見て、」を付け加えており、“said the tyrant.” や “cried Damocles.” は削除している。原文に忠実とは言えないが、口語体で書かれていることもあり、読みやすく、また物語の世界にも容易に入り込めるようになっている。

教材の目標と選択の基準は、「天の巻」にある「編纂趣意」に記されている。

> 本書は、児童の読物として、又、父母兄妹諸君及び教師諸君の児童教養上の参考書として編纂したるものにして、児童が、之に依りて多少にても、言語を練習し、知識を増進し、読書力及び作文力を補助し、想像力を育成し、文学的趣味及び道徳的感情を涵養すべきことを期したると同時に、父母兄姉諸君さては教師諸君が、児童より物語を請求せられたる時の資料となり、進んで訓諭材料となり、修身例話の補助教材を供し、話し方教授の材料ともなるべきことをも忘れざりき。

国語科の目標のようにねらいが多岐にわたってはいるが、「材料の選択配列」の箇所にも目を配ると、次のように書かれている。

> 本書は材料を内外の童話・寓話・神話・伝説・逸話・史談等に、求め、その中より、興味ありて教訓の含まれたるものを選択し、之を教育的に又我が現今の国状に適する様塩梅したり。従つて事実の正確如何を問はざる点は、之を改作したること少なからず。

興味があり、教訓が含まれている話を選んで改作も厭わなかった、とある。本書の特徴は、様々な目標を掲げてはいるが、やはり題名のとおり「教訓」を重要視しているところにある。巻末には「徳目索引」が用意されており、「孝行」「友愛」「朋友」といった徳目の中に各話が位置づけられている。教えるべき徳目を予め決めてから、それに相応しい話を選べるようになっており、徳性を養うために「お話」をシステム化したテキストといえる。

『西史美談』

最後は三土忠造著作の『西史美談』である。三省堂から明治 41 年 7 月に発行している。この書については、二期国定教科書の『高等小学読本』の底本、あるいは参考図書となった可能性があるため、詳しく説明する必要がある。

筆者の三土忠造は一般的には政治家として知られているが、教育にも深い関わりがあった。1892（明治 25）年に長尾尋常高等小学校で教職を経験し、その後、高等師範学校に入学。1897（明治 30）年に卒業した後は、高等師範学校助教諭件付属中学校教諭となっている。教科書編集にも携わり、『中等国文典』（明治 31 年）をはじめとする文法教科書を発行し、国定第二・三期の国語教科書編集にも関わった。このように三土は国語教育界にも影響を及ぼした人物である。

三土は『西史美談』を著した理由を「序」の中で次のように述べている。

> 欧米の読本史書文学書を読みて面白く感じたる美談をその折々に印して置いたのを気の向いた時々に補訳したのが積って一小冊子にする程になった。体操遊戯の出来ない雨降りの時間などに小学校教師の談話の種子や少年少女の家庭の読物にでもして貰いたくて板にしたのである。

出典を「欧米の読本史書文学書」と示しているが、23 話中 10 話がフェイマスストーリーズと重なっている。対応している話は次のとおりである（先に示した方がフェイマスストーリーズ、後で示した方が『西史美談』）。King John And The Abbot と「第八　三難題」、Bruce and the Spider と「第廿二　蜘蛛の教訓」、Sir Walter Raleigh と「第十八　受爵の外套」、Grace Darling と「第十九　惻隠の力」、The Story of Regulus と「第十四　武士の一言」、Cornelia's Jewls と「第二十　コルネリアの宝石」、Horatius at the Bridge と「第十三　救國の眼と腕」、Damon and Pythias と「第十七　真の知己」、Diogenes the Wise Man と「第九　大欲と無欲」、Maximilian and the Goose Boy と「第一　国王と鷲鳥飼」である。ただし、これらが全てフェイマスストーリーズを原本としているわけではない。例えば「第十九　惻隠の力」（グレース・ダーリングの話）はフェイマスストーリーズと話の筋は同じであるが、内容がだいぶ異なっており、他のリーダーを原本としたと考えられる。

フェイマスストーリーズ以外ではニューナショナルリーダー（「第一五　フランクリンと母の対面」、「第一六　ベートーフェンの月光の曲」、「第廿一　千金の馬鈴薯」）、ブッハイム読本（「第三　老廃兵のヴァイオリン」）、ロングマンスニューリーダー（「第七　少年鼓手」）等を原本としたようだ。フェイマスストーリーズをはじめとして、語学学習でよく用いられていたテキストから採っている。また「美談」を集めたと言うだけのことはあり、修身向きの話が多いが、観念的な話ではなく、ストーリー性豊かで興味深い話が揃っている。

そしてこの『西史美談』は二期国語読本（『尋常小学読本』と『高等小学読本』）に多くの教材を提供した。次のページの図で示したとおり、『西史美談』と『国語読本』では共通する内容の話が 8 話あり、その一つに「真の知己」（Damon and Pythias）がある。この 8 つの話は一期の読本には存在せず、二期の読本から新しく採用された教材であり、全体の（部分採用の場合はその部分の）記述内容は概ね同じものである。「真の知己」を例にすると、まず、「題名」がどちらも「真の知己」であり、本文も、冒頭部分に大きな違いがみられるものの、後半部分は、ほぼ同じ内容となっている。特に最後の一文（「王の心の奥の奥から出た嘆声であった」）は『西史美談』で新たに付け加えられたものであるが、読本にも同じ文言で存在している。以下のとおりで

ある。

『西史美談』		『国語読本』			
No.	題名	校種	巻	課	題名
第一	国王と鷲鳥飼				
第二	芸術の光				
第三	老廃兵のヴァイオリン	尋常	十二巻	二十課	辻音楽
第四	子供十字軍				
第五	赤誠の徳				
第六	郵便切手の発明				
第七	少年鼓手	尋常	十一巻	十三課	少年鼓手
第八	三難題				
第九	大欲と無欲				
第十	最も幸福な人				
第十一	馬鹿の番附				
第十二	コロムブスの卵	高等	三巻	二十四課	西洋雑話
第十三	救国の眼と腕	高等	二巻	十一課	護国の眼と腕
第十四	武士の一言				
第十五	フランクリンと母の対面				
第十六	ベートーフェンの月光の曲	高等	二巻	十二課	月光の曲
第十七	真の知己	高等	二巻	三課	真の知己
第十八	受爵の外套	高等	三巻	二十四課	西洋雑話
第十九	側隠の力	尋常	十巻	十九課	勇ましき少女
第二十	コルネリアの宝石				
第廿一	千金の馬鈴薯				
第廿二	蜘蛛の教訓				
第廿三	寸鉄集				

『西史美談』
ヂオニシユスは、二人の信義と愛情とに感激して、人間本来の善心に立帰って、ピチアスの刑を許した。
　若し、唯の一人でも、こんな親友を持つことが出来るならば、王者の富も位もいらない。
とは、王の心の奥の奥から出た歎声であった。

『高等小学読本』
王は二人の信義と愛情に感激して、ピチウスの罪を許した。
　若し我にもこんな親友を持つことが出
　来るなら、王者の富貴も栄華もいらない。
とは王の心の奥の奥から出た歎声であつた。

このように両者は酷似しており、『高等小学読本』では『西史美談』の話を採用したと考えるのが妥当だろう。Damon and Pythias は『西史美談』を経由して国定教科書の教材となったのである。

以上であるが、テキストによって方向や程度の違いはあるものの、総じてフェイマスストーリーズの話の意義を、楽しみながら教訓を学び、品性を養うことができる点に置いていたといえるだろう。

4．おわりに

本稿では「英語副読本」から出発したフェイマスストーリーズとそこに含まれた Damon and Pythias が、参考書、子ども読み物、そして国定教科書へと領域を横断して受容されていたことを確認した。

英語教育の場でテキストが増殖した理由には、斎藤兆史が説明しているように、中学校数や学生数の増加に伴う教育の大衆化や、日英同盟の締結と日露戦後の英語ブームによって英語産業が興隆したことなど当時の社会的な事情があったのだろう(9)。英語が受験の手段となる中で、今回検討したテキストの中には訳読を最終目標として、分解し語釈を付した、いわば読解教材と化したものも見られた。しかし一方で、優れた文学を教養として人格形成のために用いるといった伝統的な文学教育観からフェイマスストーリーズを読み物教材として扱おうとした立場もあった。

他方、子ども読者を対象にしたテキストが編まれた背景には、お伽噺の興隆が時代の大きな流れとしてある。

フェイマスストーリーズが普及したこの時期は、巌谷小波の「世界お伽文庫」（明治 41 年 5 月）が「世界お伽噺」に続いて博文館から創刊され、お伽話集が社会で流行した時期である。巌谷によるアラビアンナイトの紹介や、選集ではあるがグリム童話の出版等により、海外の作品が子ども向けおとぎばなしとして定着していくのである(10)。英語教育の場で用いられていたフェイマスストーリーズもこの期に乗じて、グリム童話・イソップ物

語・アラビアンナイト等と並び称され「世界の読み物」として権威づけられ評価を与えられたのだ。そして『家庭物語』『世界新お伽』といったタイトルで売り出されていることからも分かるように、この時代の要請によって子ども読み物の世界に引き込まれていったのである。そこでは、英語教育の場で作られた価値判断に依拠してフェイマスストーリーズを評価するという面もあっただろうが、楽しみながら教訓を学び、品性を養うことができる点が評価されていたのである。

訳者や編者の言説の中には、確かに、子どもの興味を尊重する言説も見られた。しかし今回調査した範囲では、大人や読み物の力で子どもを導くという方向性は共通しており、子どもは啓蒙の対象として見られていた。子どもを純粋で無垢な存在として理想化する見方はまだ存在しなかったのであり、その意味で、既存の「お伽話」を批判してはいても、教訓性と娯楽性を重視しつつ子どもを教え導こうとする小波時代の「お伽話」の範疇にあったといえるだろう(11)。

では次に来る「児童本位」の時代に「ダモンとピシアス」はどのような受容を見せるのだろうか。引き続き調査を続けたい。

【引用・参考文献】

(1) 佐野幹「『フェイマスストーリーズ』の流入経緯と託された期待」「読書科学」第57巻第3・4合併号、2016年10月、76－87頁。
(2) 文部省『中学校・高等女学校現在使用教科図書表明治40年度』芳文閣、1908年8月。
(3) 江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか―英語教育の社会文化史』研究社、2008年11月、75－76頁。
(4) 尾崎るみ「教科書から絵本へ、グレース・ダーリングの幅広い受容―明治の少女向け読み物の軌跡(10)」「論叢児童文化」第50号、48－60頁。
(5) 奥村淳「太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性」「山形大学起用人文科学」第17巻1号、山形大学、2010年2月、39－78頁。
(6) 『新訳西洋五十名話』を英語の参考書として位置づけたけが、それは題名が「新訳」であり、「はしがき」に「参考書として研究用に座右に置かれても宜しい」と書かれていたことによる。しかし、子ども読み物との境界線上に位置してもおかしくはないテキストである。
(7) 「国立国会図書館デジタルコレクション」では、「第2編泰西名話の部」、「第3編印度名話の部」、「第4編印度名話の部」、「第6編希臘名話の部」、「第7編希臘名話の部」を閲覧することができる。
(8) 馬淵冷佑編『内外教訓物語』宝文館、1909年9月、4－5頁。
(9) 斎藤兆史『日本人と英語―もうひとつの英語百年史』研究社、2007年10月、20頁。
(10) 西尾哲夫『アラビアンナイト―文明のはざまに生まれた物語』岩波書店、2007年4月、154頁。奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話―時代による変化を読み解く―』世界思想社、2005年4月、135頁。
(11) 子ども観の形成、変化については、河原和枝『子ども観の近代』中央公論、1998年2月。

（宮城教育大学）